

熊本地震の DMAT 本部長を招き講演会 ふだんの医療の立て直しが重要

「災害時に医療を守るため、私たちは何をすればいいのか」を考える日本 DMAT（災害派遣医療チーム）研修インストラクターで神奈川県藤沢市民病院救命救急センター長の阿南英明氏の講演会が 5 月 23 日、通所リハビリセンター「茶釜の湯」で開かれました。会場には前場文夫結城市長、須藤茂筑西市長、白井平八郎県議をはじめ、医療、消防、警察、行政、福祉関係者や看護学生、地元自治会など約 240 人が集まり、熱心に阿南氏の講演を聴いていました。公益財団法人「茨城国際親善厚生財団（IIFF）」、達生堂グループ主催、結城市、筑西市、筑西広域消防本部など共催。

阿南氏は、東日本大震災が発生した時には、日本 DMAT 事務局本部で支援に携わった後、岩手県の大船渡や陸前高田地区に入って救援活動を展開。熊本地震では DMAT 事務局で本部長を務めました。それらの経験から、講演は「災害時に地域の医療を守る術を考えようー日常の医療を継続するだけ…けどちょっと工夫が必要だよ」をテーマに、大災害時の状況から、問題点、医療を日常に戻すためのアドバイスなどを分かりやすく解説しました。

「東日本大震災の時に、茨城県内の 185 の病院のうち 170 病院が被災した。日常では 119 番すると助けが来るのが当たり前。しかし、当たり前のことが災害時に行われるのか、がスタート」と現実の大災害で救援活動を行った経験から話す阿南氏。「大災害時には通信が途絶え、SOS を求めることができない。やっと通報が通じても、すでに多くの SOS が発信された後で、通常と大きく対応スピードが異なってくる。そして、病院には大勢の患者が押しかけ、病院がパンクする」と災害時の状況を解説。「ある市では、大災害時

阿南英明氏

1991 年
新潟大学医学部卒
1994 年
横浜市立大学救命救急センター
1998 年
藤沢市民病院救急部
2011 年
東京医科歯科大学医学部臨床教授
2017 年
藤沢市民病院診療部長・救命救急センター長



は火災が優先で、負傷者の救出は火災が収まった後と、事前に市民にアピールした市もある」とし、災害時の“自助”、“共助”、“公助”の概念を示し、自助、共助を強化し、公助は平時に役所と相談し体制を考えるリスクコミュニケーションの大切さを説きました。

医療機関では「病院は医療と生活の機能が大切」と強調。建物が大丈夫でもライフラインが寸断すれば日を追うごとに体調を壊す人が出る。高齢者の多数はふだんから何らかの薬を使い、途切れると体調が悪くなるが、病院には薬をあまり置いていない。通信、流通が途絶えた中で、薬が不足して命にかかわることになる。復旧が遅れると、地域全体の医療が成り立たなくなる状況を説明し、「大災害ほど間接死亡が増え、対策が必要となる」と話しました。

最後に「災害時の医療は、崩壊した医療体制の立て直しが重要。ふだんやっていないことは、突然できない。災害時には日常的医療を継続することだけを考える」とし、CSCA（Command & Control = どこに情報を集めるのか、指揮系統の確立、Safety = 安全の確認、Communication = 通信体制の確保、Assessment = 評価と対応計画）をふだんから意識し、災害が起きた時にどう対応するか想像力を働かせることが大切と結びました。

平成 30 年 5 月 25 日

